

# 子どもたちが 人・もの・こと とのかかわりを広げていくための新聞活用

指定校 1 年次 東御市立和小学校 油井 玲子 笠原 恒彦

## I 本校の新聞活用（NIE）の現状

本校は全校児童およそ 360 名の中規模校である。校内には図書館の調べ学習コーナーに新聞が置かれている。また、児童会掲示版には、担当委員会が小学生新聞を掲示している。足をとめて眺める姿は見られるものの、手にとって詳しく読む児童は少ない。

## II 実践のねらい

本校児童の実態に照らした新聞活用を考えたとき着目したいのは、課題解決の過程により培われる力である。自分が求めていた情報を得るための道具としての新聞だけでなく、思いもよらない事実との出会いの場、また、自分の考えや思いを伝える手段としても新聞を活用したい。今までは目を向けることがなかった人・もの・ことに会い、友と深くかかわりながら課題解決に向かう過程に新聞をどう活用できるのか、新聞活用の 3 視点に沿って授業を構想すると共に、環境づくりを進めた。

## III 研究の概要

### 1 授業を構想する上での手立て

#### A 新聞で学ぶ（読んで使う新聞記事活用）場面で

- (1) 子どもたちの意識に沿った、必要感のある記事を選ぶ。
- (2) 子どもたちの心を揺さぶり、友との対話を誘起する記事を選ぶ。
- (3) 子どもたちが考えを広げたり深めたりするきっかけになるような、同じ事柄を異なる視点で捉えた記事を選ぶ。

#### B 新聞を学ぶ（知って考える新聞記事機能活用）場面で

必要に応じて情報収集の手段を選択できるように、

- (1) 新聞のよさ（信頼度が高い・手元に保存できる・読み手のニーズに合わせている・定期的に発行される など）を取り上げる。
- (2) 他のメディアの特徴と比較する学習の場を設定する。

#### C 新聞を作る（作り発信する新聞製作）場面で

- (1) 相手意識、目的意識を明確にし、取材対象や読み手との交流を図る。
- (2) 新聞本来の機能を正しく学べるよう、実際に新聞作りに携わる方から 取材・記事作成・構成・レイアウトを学ぶ場を設定する。

### 2 環境づくり

#### (1) 新聞コーナー

- ・毎日の新聞を自由に読めるようにする。
- ・係職員がテーマに沿った記事を切り抜き、掲示する。
- ・子どもたちの取り組みを紹介する。

## (2) 特別教室での展示・保管

- ・調べ学習基地となる図書館へ、新聞を展示・保管する。
- ・理科室にて、気象情報や関連記事を取り上げて掲示する。

## IV 授業実践

### 1 単元名 「古着回収を通しての難民支援」(6年 総合的な学習の時間)

### 2 単元の目標

世界中に2200万人以上いる難民の生活に目を向け、子どもたちにもできる古着回収の活動を通して、ものを大切に作る気持ちや困っている人の気持ちを考えながら、友と協力して難民支援活動ができる。

### 3 子どもの実態

子どもたちは、道徳の時間の『「MOTTAINAI」を世界共通の言葉に(3R+リスペクト=もったいない)』の学習をきっかけに、3Rを特集した新聞記事に出会い、古着回収を通して難民を支援する活動があることを知った。すると「店頭で古着を回収しているお店があるよ。」との情報が学級に広がり、ユニクロの“届けよう服のチカラ”プロジェクトへの関心が高まった。

ユニクロ上田店の店長さんに来校いただき お話を聞く中で子どもたちは、国内から逃げ出さなければいけない何らかの理由を持った多くの難民・国内避難民がいて、その約半数が子どもであること、一つの国ではなく世界中に存在する問題であること、そして、UNHCR(国際連合難民高等弁務官事務所)を通じて、自分たちも古着回収により難民支援に参加できることを知った。

難民が置かれている過酷な現状を知るにつけ、子どもたちの中に「何とかしたい」という気持ちが高まる一方で、難民と呼ばれる人々が困っていることはわかるが、戦争や内紛、宗教、人種、政治的な問題など複雑な問題が絡んでいて難しく、話を聞いた後でも、「どこの国で起きているのか」「なぜ起きているのか」をほとんどの児童が詳しくは理解できていなかった。

そこで、難民の人たちの力になりたいという子どもたちの気持ちを大いに尊重しつつ、知識については教師が補足する必要を感じ、本単元を構想した。

### 4 手立て

- ・子どもたちの考えを生かし、クラス、学年、プロジェクトの担当者での話し合い活動を大切にして、呼びかける活動範囲を可能な限り支援していく。
- ・難民のいる地域、数、UNHCRについては、ユニクロからいただいた冊子を中心に学習を進める。
- ・難民の人の様子がイメージしやすいように、新聞記事・図書館・インターネットなどを活用する。

## 5 単元展開

月	学習活動計画	時	各教科との関連	N I E
6	○物を大切にすることが大切であることを持つ。 ○“届けよう 服のチカラ”プロジェクトのお話を聞こう。(ユニクロ上田店店長さんの話)	3	道徳：わたしたちの道徳	信毎 2016/5/6 2016/5/7 「Re から」
7	○活動に参加するか、どんな活動ができるか考えてみよう。	2		
8	○難民について調べよう。	3	社会科：世界の中の日本の役割	
9	○難民の人たちを知る①：犬養道子さんの記事から考えよう	1		信毎 2006/7/25
	○難民の人たちを知る②： ・シリアの水泳選手はオリンピックに出られるか予想しよう。	1		信毎 2016/12/7 信毎 2016/3/26
	・ユスラ・マルディニさんの記事から考えよう。	1	本時	信毎 2016/7/18 信毎 2016/7/1 読売 2017/9/5
	○難民キャンプにメッセージを届けよう。 (手紙と絵を学級1枚)	2	学級会 「何を送るか考えよう。」	
	○服の集め方を考え準備をしよう・依頼、呼びかけ・回収準備	1	国：依頼文作り 図：ポスター作り	
10	○“服のチカラ”プロジェクトを実行しよう。 ・服集め・仕分け・送付・記事の紹介	3	家庭科：衣服のたたみ方	

## 6 教師が願う子どもの姿

- ・服を届ける活動を校内、地域にも広げていくことを通して、友と関わり協力する喜びを味わってほしい。
- ・難民について学習することを通して、世界の様子を理解し、世界平和や他者への理解を深め、人に寄り添う気持ちが持てるようになってほしい。

## 7 本時 手立てA-(2)・(3)

ねらい	ユスラ・マルディニさんがオリンピックに出られるのかどうか予想した子どもたちが、困難を乗り越え、支援を受けてオリンピック出場を果たしたマルディニさんがいる一方で、多くの難民が今も困っている現状を考えることを通して、全ての人に幸せになってほしいと願いを持つことができる。
本時の位置 (11/17h)	オリンピック難民選手団のユスラ・マルディニさんの記事から考える。 前時：ユスラ・マルディニさんはオリンピックに出られるのかどうか考える。 次時：難民キャンプにメッセージ（手紙と絵）を届けよう。

<p>前時までの意識</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・回収を呼びかけるポスター作りで、難民をどう説明するかで戸惑い、より具体的に難民について知るために図書館の本で調べ学習をした。</li> <li>・調べ学習の中で、難民がおかれる過酷な現状を知り、中でも犬養道子さんの記事に衝撃を受けた。</li> <li>・シリアの水泳選手であるユスラ・マルディニさんはオリンピックに出場できたのか予想を立てた。</li> </ul>
<p>本時の展開</p>	<p>学習問題 : ユスラ・マルディニさんは、どのようにしてオリンピック出場を果たしたのだろうか。</p> <p>学習課題 : どうやって夢を実現したのか。</p> <p>学習活動① 信毎 2016/7/18「リオ出場の2人」を読み、疑問を感じた箇所には赤線、新たな気づきには青線を引く。</p> <p>学習課題 : どんなことを考えて出場したのか。</p> <p>学習活動② ユスラ・マルディニさんが予選で泳いでいる映像を見る。</p> <p>学習活動③ 読売記事 2017/9/5「シリア出身の国連親善大使」からユスラ・マルディニさんが東京オリンピックの出場も目指していることを知る。</p> <p>ふり返り : シリアの現状を再確認し、自分は多くの難民の人たちがどうなっていくことを願っているのか、考えをまとめる。</p>

[資料 : 本時扱った新聞記事]

信濃毎日新聞 2016/7/18

シリアの首都ダマスカスで生まれたマルディニは、3歳から始めた水泳のおかげで生き残ることができた。

「すでに家だった」という自宅は内戦で破壊され、連日アラールの屋根に爆弾が落ちていくという危機一髪の経験も。泣く泣く故郷を離れた昨年8月には、五輪出場など夢にも思わなかった。

トルコ西海岸のイズミルからギリシャに向かうゴムボートは定員超過の約20人でひしめき合い、沈みかけた。「出港してわずか30分でエンジンが止まっ

18歳のユスラ・マルディニは女子100m自由形、25歳のラミン・アニス(ラミン・アニス)は男子100mバタフライで出場権を得た。2人とも政治的な発言は控えるが、世界のスポーツライトを浴びる五輪はスポーツを通して自分自身を表現する最高の場でもある。五輪旗の下、国家の枠を超え、開会式で進行する両選手は「絶望の淵でも小さな光は見える。世界の難民に平和と希望のメッセージを届けたい」と目を輝かせた。

国旗や国歌を失った立場でも五輪への情熱は変わらない。内戦で混迷を深めるシリアを命懸けで脱出し、ドイツとベルギーに渡った2人の競泳選手。失意の底からそれぞれの運命に導かれ、8月5日開幕のリオデジャネイロ五輪で史上初めて結成される「難民五輪選手団」の一員として夢の舞台に立つ。

「難民選手団」リオ五輪出場の2人



リオデジャネイロ五輪で史上初めて結成される「難民五輪選手団」の一員として、競泳男子100mバタフライに出場する25歳のラミン・アニス(右)と18歳のユスラ・マルディニ(左)。(撮影・澤田博之、共同)

伝える 訴える

シリア

た。生きるために必死だった。夕闇が迫るエジプト海に無我夢中で飛び込み、4時間近くボートを押しながらレスポス島に泳ぎ着いた。「海は暗く、冷たくて怖かった。着いたバシヤツとジャーバン以外は全て失ってしまった」と今も恐怖がよみがえる。

マケドニア、セルビア、ハンガリーと陸路で国境を越えてドイツに入った。ベルリンのクラブが受け皿になり、学校に通いながら練習を積む日々は「2年間練習しなかつた分、幸せを感じた」。

両親とも再会し、内戦で失った時間を取り戻すようにタイムもぐくんぐん伸びる。こんな困難も、嵐のよう日々々も、いつかは落ち着く。母親を離れて暮らす難民の人たちに生きる勇気

「平和と希望届けたい」

「を与えたい」とあどけない顔に笑みがこぼれた。

8 実際の授業から (T : 教師の発問 © : 授業内での他児童の発言)

(1) 新聞記事にふれることにより、漠然と捉えていた「難民」をより現実味のある存在として感じたA児

<p>T : 見つけた記事に赤線、分かったことに青線を引こう。</p>
<p>A : 18歳のユスラ・マルディニは、女子100メートル自由形・・・(読み始める)</p> <p>…「あった、あったこれこれ！」と『トルコ西海岸のイズミルから～今も恐怖がよみがえ</p>

る。』まで線を引く。『四時間近くボートを押しながら・・・』を読んだときには、「すげーな。」と一言。

T：ユスラさんはどんなことを考えて出場したのかな。

A：2～3分考え、書き始める。『シリアに／暮らす友だち／のためにも難民の。』で止まる。

T：自分の気持ち、これからのことを書いてみよう。

A：新聞をじっくり読み返して記入。『ユスラマルディニさんは、オリンピックに出て、次はシリアの選手で出場してほしい。』

### 【 考 察 】

A児は、記事を読み進める中でユスラさんが自国からどのように避難したのかを読み取ることで、その過酷さを目の当たりにしたようであった。ユスラさんの気持ちを考える場面では、自分と重ねる姿も見られ、オリンピックへの出場を果たした事実を知った後でも、自分の国の選手としては出場が叶わないユスラさんの悲しい現状に心を寄せ、「応援したい」という気持ちを強くしていった。



(2) 友だちと共に新聞記事にふれることで、

内容の理解を深めたB児・学級に位置付いていったC児

T：ユスラさんはどこの国から出場したのか？ どうやって逃げ出したのか？

B：海で渡って行っちゃった？

(その後新聞記事から情報を探す場面で、友達の学習カードを見ながら線を引いたりする。)

T：どんな気持ちで逃げたのか？

B：シリアに感謝をこめてメダルを持ち帰りたい。勝ってシリアに勇気を伝えたい。

C：(タブレットを使い、学級のテレビ画面にシリア周辺の地図や難民の数を示すグラフを提示したりした。)

### 【 考 察 】

新聞記事には、小学6年生には読めない漢字や意味が分からない言葉が数多く並ぶ。また文字数が多く、読み慣れない子どもたちには注目すべき記述を見つけることすら難しい。本時は読み取る場面でグループ活動を取り入れ、互いに教え合ったり情報を共有したりできるようにしたことで、一人では記事を読み進めることが難しい子どもたちも内容を理解し、事象に対する自分の考えをもつことができた。



また、一人で読み進めることが難しいからこそ、学級全体で記事にふれる必要性が生じる。C児はタブレットを操作して記事を拡大したり、関連する資料を画面に映し出したりする役割を担ったことで、自らが資料を提示する立場に立ち、記事の内容に入り込むことができた。学習に新聞記事を取り上げることは、友だちと一緒に学ぶことのよさを感じることもつながる。

(3) 新聞記事から過酷な状況を知り、感じたことを友だちと交流することで、支援への意欲を高めたD児

T：ユスラさんはどんなことを考えて出場したのだろう？

D：人生で一度しかないチャンスと決意して出場した。どんな困難も嵐のような日々もいつかは落ち着く。

T：だれを支援していきたい？

◎：すべての人を支援したい。

(授業後D児が古着を集めるためのポスターに書いた文章)

難民とはどんな人のことか知っていますか？戦争や内戦などで被害を受け、避難している人のことです。その人たちの中には、大事な家がこわされてしまったり、大切な家族と離ればなれになってしまった人もいます。私たちは楽しく生活していますが、難民の人たちは今も、知らない場所で不安な生活をしています。そこで、私たちは服のチカラで笑顔になってもらえるようにユニクロ、UNHCRを通じて服と笑顔を届けます。



### 【考察】

全校へ子ども服集めを呼びかけるポスターを一人ずつ描く中で、難民の学習から訴えたいことを200文字以内でそれぞれ考えた。D児の文章の中に、ユスラ・マルディニさんの記事と重なる部分(下線部)があり、マルディニさんの記事がD児には強く印象に残ったことがうかがえる。

## 9 授業のその後

リオオリンピック後のユスラさんの記事(読売新聞2017/9/5)から、平成29年8月末にUNHCRの親善大使として来日し、2020年東京オリンピック出場を目指していることを知った。そこで、「20年東京オリンピックに出場してほしい。」と願う子どもたちの姿があった。

ある児童は10月のある日の日記に、「ドイツが難民受け入れを20万人に制限した」というニュースを受けて、「もっと他の国も受け入れの協力をしてほしいと思いました。」と書いた。この感想から、「ドイツの20万人の受け入れは多いのか」「日本の受け入れ人数は？」という新たな疑問が生まれ、その疑問は学級全体へ広がり、授業の後も難民への意識はつながっていた。

活動後、ユニクロから活動報告DVDが届いた。そこには、難民キャンプの子どもたちが日本から届けられた服を着て嬉しそうに笑う様子が映っていた。そして、その中には驚くべきことに、現地の方が本校児童手作りのメッセージカードを手に入れている写真もあった。6年生の子どもたちは自分たちの活動が確かに世界とつながっていることを実感した。



集まった約6000着の子ども服をたたみ発送の準備をする子どもたち

#### IV その他の実践

学年・教科 『单元名』	手立て	概要	成果と課題
2年 生活科 『名人新聞 を作ろう』	C-①  C-②	地域の名人にインタビューをし、記事にした。  インタビューの仕方、新聞の書き方を、信毎の方から直接学んだ。	インタビューをすることで地域の方の思いにふれ、また新たな関わりが生まれた。お世話になった方へ新聞を届けたいという気持ちが、根気強く新聞作りに取り組もうとする意欲につながった。新聞を書くことは2年生には難しい面があるので、構想シートを工夫して作りかえ、活用した。
特別支援学級 総合 『一枚の写真』	A-②	2000/7/7 朝日新聞 『1945年 焼き場に立つ少年』を資料に、 戦争の悲惨さを知り、平和への 願いをもつ。	子どもたちは記事の写真がもつ力に引き込まれ、その事実に衝撃を受け、読み取れることや感じたことを次々に口にして考えを交流していった。内容が厚く時間が足りなくなるので、2時間扱って深めたい。
5年 理科 『天気の変化』	A-①	新聞の天気欄を使い、台風の 通り道調べをした。9月から 1ヶ月、クラスごとに“台風 調べ当番”を設け、当番は新 聞を見ながら教室の模造紙に 台風の位置をプロットしてい った。	プロットした位置が変化していく様子ははっきりと分かり、台風の動きを身近に感じながら学ぶことができた。ただ、台風がない日に当番に当たった児童はシールを貼ることができず、全員が同じように活動できなかった点については、改善の余地がある。
6年 道徳 (理科の発展) 『亡き友の分まで 生きよう』	A-②	理科の単元「大地のつくりと 変化」で地震について学んだ 後、道徳として東日本大震災 についての記事をもとに学習 した。多くの友を失った小6 女児の声を受け、考え合った。	地震について学んだ時点の子どもたちは、実際の規模や様子をイメージすることは難しかった。しかしこの記事に出会ったことで改めて地震の恐ろしさを目の当たりにし、それでも懸命に前向きに生きようとする姿に、心を動かされている様子うかがえた。
4年 国語 『新聞の書き方 を学ぼう』	C-②	新聞の書き方を信毎の出前講 座で記者さんから学び、社会 見学について新聞形式で まとめた。	自分が一番伝えたいことは何か、それを伝えるために書くべきことは何かを考えながら記事を書く過程で、見学で学んだことを整理したり、新たに生じた疑問を明らかにしたりすることができ、見学の学びも深まった。(ゴミ処理場見学・長野市見学・夏休み新聞コンクールの3回、新聞を書く活動に取り組んだ。)

## V 手立てから振り返る本年度の成果と課題（○：成果 ●：課題）

### A 新聞で学ぶ（読んで使う新聞記事活用）場面で

- 課題解決学習での子どもたちの意識に沿った新聞記事を選び提示したことで、子どもたちは自分たちの活動が今まさに起きている問題に直結していることを肌で感じた。記事が原動力となり、更に活動を推し進めようとする意欲につながった。
- 一つの事象を様々な視点から捉えた記事を提示することで見方や考え方が広がり、友だちと考えを交流したり、自分の考えを明確にしたりすることができた。
- 小学校で扱うには難しいことが多いので、提示の仕方を工夫する必要がある。
- 授業者が新聞記事をどう扱うかによって、学習内容は大きく変わる。目指す子どもの姿、その記事を取り上げる目的を明らかにした上で、記事内容の事実を正確に扱うために、更に入念な教材研究が必要である。

### B 新聞を学ぶ（知って考える新聞記事機能活用）場面で

- 刻々と変化する情勢について調べる場面で、新聞にはタイムリーで信頼度の高い情報が載っていることを子どもたち自身が感じる事ができた。  
(6年「総合：難民支援」の調べ学習で、子どもたちは本を数十冊借りて現地の様子について調べたが、手にした本の出版当時のシリアはまだ「平和な国」とされていた。また、インターネットで調べてみると、サイトによってデータの数値にかなりの開きがあり、子どもたちは信憑性に欠ける情報もあるのではないかと感じた。)
- 全校児童の目にふれる場所に新聞コーナーを設けたことにより、毎日特定の記事を楽しみに立ち寄る児童が出てきた。
- この側面について本年度は実践があまり進まなかったもので、次年度以降 更に深めたい。

### C 新聞を作る（作り発信する新聞製作）場面で

- 新聞作りを通して、地域の方とのより深い関わり、新しい関わりが生まれ、地域との結びつきが強い和小学校のよさを生かした学習活動が展開できた。
- 6学級が信毎の出前講座を利用し、学年の発達段階に即した新聞作りを学ぶことができた。構想シートを使い、新聞の記事のつくりを専門家から直接学ぶことで、書くことに苦手意識がある子どもたちも文章を構成することへの抵抗が薄れ、筋道の通った文章を書くことができるようになってきた。



校舎内ホールに設けた新聞コーナー



新聞コーナーで  
新聞を手にする子どもたち